
Spaced-Out ~ saber of partisan ~

斥丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S p a c e d - O u t } s a b e r o f p a r t i s a n }

【Nコード】

N 2 4 7 5 B

【作者名】

斥丸

【あらすじ】

S p a c e d - O u t 三部作（予定）の第一部です。頻繁に更新という訳にはいきませんが、お付き合い下されば幸いです。

prologue

寥々たる荒野が広がっていた。

かつては世界有数の大都市として栄えた東の地は、今や何の光も無い平地として夜に蔓延っている。所々に残るビル郡の残骸が、ここが以前に輝かしい都だったことを教えていた。だが、広がる星空に照らされる東都の骸からは、昔の姿など想像のできようもない。

そんな荒野の中心付近。まるでミサイルが着弾したかのようなクレーターが、地面に大きく穿たれていた。擂鉢状に広がるクレーターは、荒野の痛々しさを際立たせている。

そんなクレーターの縁に、一人の男が倒れていた。

息は弱々しく、心臓は僅かに拍動を続けるのみで、生命の力を感じることができない。要するに男は、今正に死にかけているのである。黒い装束をより濃い黒に染め、長い白髪を朱に濡らす程の出血は、男の残り少ない命をも削り続けていた。

男は、人々に英雄と呼ばれた存在だった。世界という強大な相手に剣を向け、虐げられた人々を背に戦った姿は、祭り上げられて然るべきものだったのかもしれない。少なくとも、人々に希望を、敵に畏怖の感情を与えるくらいには。

頭上に燦然と輝く星空を見上げ、男は小さく溜め息をついた。都市の機能が麻痺した中で、都市の灯りに追いやられていた星明かりが、細々とした人々の希望を繋いでいるのかと思うと、皮肉に思えて仕方なかったのだ。

男は再度、より大きく息を吐いた。それはやり遂げたという満足感の表れ。世をこんな姿にした元凶は、つい今しがた消滅した。同時に己の身も砕けたが、そこに何の憂いがあるうか。後悔も無い。自分は約束を果たせたという満足感が、他の感情に勝っていた。

頭に巡る、友らの姿。最後まで共に、駆け抜けた親友がいた。自分の信念に重きを置き、一度は袂を分かった戦友がいた。元は敵として刃を交えた男もいた。走馬灯とはよく聞くが、死の前に昔を懐かしめるのなら、悪い物でも無いな、と男は薄ら笑う。そうとも、懐かしい面々に会いに行く、それだけなのだ。

ふと、一つの影が、頭をよぎった。

それは、守れなかった少女の顔。自分に未来を託して死んでいった少女の、在りし日の姿がそこにあった。

「まいったな……」

男は朦朧とする意識にすがりながら、空に右手を伸ばした。震えるその手は、何かを探るように虚空を撫でる。

「未練が……できてしまった……」

弱々しい苦笑を浮かべたかと思うと、男の右手は地に墜ちた。事切れた男の体ごと空間が歪み、渦巻いていく。

（……神も物好きだな、私にやり直せと言うのか）

次の瞬間、男の骸は、もうそこに存在していなかった。ただ、地

面に残る血の跡だけが、男がそこにいたことを示している。

誰もいなくなった空間を、明るすぎる程の月光が満たしていく。

——そういえば、今日はいい月が出ている。

それは夜のしじまの幻聴か、はたまた夜風の音の悪戯か。だがその声は、確かに男の物に聞こえた。

望月の光が世界を照らしていく。その光はあまりにも妖艶で、運命を弄ぶ女神の微笑みのように見えて仕方がなかった……。

1：蠢動

その都市はまるで、一つの生命のように蠢めいていた。縦横に張り巡らされた道路は無数の血管群、それを走る鉄の塊はさながら血球細胞。夜の暗闇を照らし出すネオンの光は、生態反応のように明滅している。

空には星どころか月も見えず、晃々と光る都市は闇の中に傲然と浮かんでいた。

そんな都の中心近く、天高く聳える塔の頂上に、地上を睥睨する青年の姿があった。艶やかな黒い前髪を垂らし、白磁の肌に浮かぶ形の良い唇に笑みを作るその佇まいは、女性と見紛うかのように美しい。だが、白いスーツに包まれた細い体躯のシルエットが、彼が男性だと教えていた。

下界を望む青年の眼には、一欠片の感情も宿っておらず、ただただ深い漆黒が妖しく光っている。それは彼の浮かべる微笑と合埃つて、奇妙な異質さを生み出していた。その眼に見入られたなら、どんな要求も拒むことはできないかもしれない。

「お呼びですか、王」

青年の背後から低い声が響き、若い女性を伴った壮年らしい男がルーフへと出てきた。背中まである長い白髪と黒いレザーコートが特徴的な男と、腰まで伸ばした髪に黒のタイトスーツ、顔に掛かる縁無し眼鏡が目立つ女性。町を歩いていたら目を引きそうな二人組である。二人が二人、相当に魅力的であることも要因の一つだが。

「やあ、 α 、 θ 。わざわざ悪いね」

「いえ、仕事ですから」

振り返りながら笑いかける青年に、 α と呼ばれた男は無表情で返す。その切長の眼には、青年の物とは質の異なる無感情が宿っていた。

「“ Ω ”の件なんだけど、あと少しで完成らしくてね。最後の仕上げに協力してやってほしいんだよ」

「……わかりました」

「詳しくは研究室に行ってくればいいらしい。時間は取らせないってさ」

青年の言葉を聞き終わると同時に、 α は踵を返して歩き始めた。一刻も早くこの場から立ち去りたいという意志が、その所作に表れていた。主従という立場にも関わらず、 α は青年に嫌悪感を抱いているように見える。

「それと、もう一つ」

青年の声に、 α の足が止まる。

「君の息子にも、兆しが現れたらしい」

場の空気が変わる。それは青年が発したもので、 α が発したものでもない。 θ と呼ばれた女性が漏らした、ほんの小さな息を飲む音だった。波紋のように渡るソレが闇に溶けると同時に、 α が静か

に口を開く。

「それが私に何の関係がある？」

「別に。只の報告、さ」

青年からはαの背中しか見えない。その背中は何の動揺も見せずに、毅然としている。だが、その内面がどんなに揺れ動いているのか。それを想像して、青年は微かにほくそ笑んだ。

「どうかな？ 護柱騎士の候補にでも」

「……………」

「ま、力量次第だけど」

青年の言葉の一つ一つが、αを挑発するかのような音を含む。それにも、αは動じた様子は見せず、無表情を通している。

「ねえ、α」

青年が笑みを深くし、目を細める。それは呼びかけというより、独り言に近い響きの言葉だった。

「僕を殺したい？」

試すように言葉尻を上げながら、笑みを色濃くしていく。αからは見えないとわかっていながら、その顔は飽くまでも挑発的だった。

「……………何を、今更」

呟くように吐き捨て、αはエレベーターホールへと消えていった。θもそれに続く。一人残った青年の顔は、満足げに歪んで、より深い闇を作り上げた。

「なに、殺すなんてことは簡単さ。君が思っている程、重いことじゃない」

もはや向ける対象のいない言葉を、青年は紡ぐ。狂気と狂喜によって作られた言葉をそして、言葉はいつしか笑いに変わっていた。嘲笑と悪意の入り混じった笑い声が、深夜近い町の上空に響いていく。

笑う彼の瞳の漆黒に宿るのは、ただただ、無感情な鈍い光だけだった。

主都に張り巡らされた幾つもの小さな路地。それらは、立ち並ぶビル群の陰にのみ蔓延るように、巨大になりすぎた都市の暗部として広がっていた。そこを知っているのは、“そういう”人間だけという空間。

ここでは何が起ころうとも関与しないという、暗黙の了解。

現に、恐喝、暴力、盗み、売春、強姦、裏取引、傷害、果ては殺人に至るまで、この世の害悪とされているような行為が、取り沙汰さえされずに、此処では毎日のように繰り返されていた。

国はそれを黙認している。いや、真の意味での無視と言える。国の頂点に君臨する青年にとって、それらは何の興味も抱かれない些事だろうから。

そもそも、都市設計の蟲喰い穴として生まれたこれら裏の空間は、——物によつては相当の広さがあるというのに——人々に認識されることは無い。結果として残るのは、年に百数十の行方不明者だけである。

そんな都市の暗がり、一人の少年が佇んでいた。

表通りの電灯に透かされて黄金色にも見える、色素の薄い琥珀色の短髪。細くはないが切長な目を始めとして、顔を構成するパーツの全てから、鋭さを感じるような印象を受ける。

少年は小さく息を吐くと、頬に飛んだ血の飛沫を気にも止めずに、自分の周りを見回した。

少年のすぐ足下に転がる五人の男達と、少し離れた所に倒れている、やや服の乱れた女性。この状況を見れば、少なくとも少年に起きたこと以外は予想がつく。意外なのは、世辞にも遅いとはいえない少年が、体つきの良い成人男性五人を返り打ちにした、という事実である。

「また随分とやらかしたな、砌」

少年が倒れた男を爪先でつついていると、背後から軽い雰囲気と呼び声が聞こえた。その中の“砌”という自分の名に、少年は反応して振り向く。そこに立っていたのは、砌と同年代らしい長身の少年だった。

やや垂れ気味の大きな目と、ウェーブがかった長めの髪。口調も合埃って、異性に好かれそうな少年である。

「なんだ、神継か」

神継の姿を見止めた砌は、興味も無さげに返事を返す。一方の神継は、人当たりの良さそうな笑みを浮かべたままである。

「何で此処に？」

「巫女に頼まれてね。あんまり人の妹を心配さすなよ」

神継は小さく笑いを溢しながら、砌の隣に並ぶ。そして、さつき砌がしていたように周りを見渡した。

「流石、強いな。正義の味方も当分は安泰って訳だ」

「何度も言わすな。これは手段だ、目的じゃない。正義だなんて言葉で形容するな」

苛立ち混じりにやや上にある神継の目を睨みつけた砌は、踵を返して路地の出口に歩を進め始めた。

「おい、あの人は助けないでいいのか？」

神継が指差すのは、路地のやや奥まった所で倒れている、OL風の女性。砌は大した反応も見せずにそれを一瞥する。

「別に。お前が助けたことにしていいぜ、何か礼ぐらいは貰えるか

もな」

「何言つてんだよ、砌君。俺が欲しいのは愛であって、体じゃないんだよなあ」

誰も体とは言っていないが、と言いたげに溜め息をつくと、砌は再度歩きだした。後ろから、神継の声が追ってくる

「お前これからどうすんだ？」

「帰る」

「なら気を付けろよ、もう十二時近いんだから」

「誰に言ってるんだか」

呆れたように呟くと、砌は表通りを進み始めた。視界には、夜中とは思えない程の、人、人、人。

「正義……か」

誰にともなく呟く。その呟きは何に気付かれることもなく、ただネオンと足音の渦に紛れていった。

声が、聞こえる。

誰？

誰が呼ぶの？

——私ハ、記録。

記録？

——ソウ。始マリカラ終ワリマデ、ソノ全テヲ綴ジシ記録。

何でワタシを呼ぶの？

——私ト貴女ハ、イズレーツトナル。

……わからない。

——理解ハ必要デハナイ。あかしつくニ従エバ、ソレガ終末ダ。

眠く……なってきた。

——今ハソレデイイ。時ハ、イズレ……。

2：四天の将

午前一時半。

淡々と時を刻む時計を眺めながら、巫女は溜め息をついた。短く整えられた黒髪が揺れ、貌のいい大きな目が光を伴って震える。

作りすぎた——意図的にだが——煮物を、近衛家に持っていていつから、もう五時間以上が経っている。

最初はただ帰りが遅くなっているだけなのだと思ったが、砌の性格を思い出すと、どこか不安になってしまった。案の定、二時間前神継に見にいつてもらったら、まだ帰ってきていなかったらしい。神継はそのまま砌を探しに出てくれたのだが、巫女の不安が晴れる様子は無い。

（砌、大丈夫かな……）

ただの喧嘩なら、まず問題は無い。砌の強さは周知の事であるし、その点に関しては巫女も、快くは思えないが安心できていた。

しかし、最近の物騒さは異常といえる。行方不明者の数は例年よりも増えているし、手口の異なる辻切りが何件も横行している。特に“鬼目”と称される通り魔は、目撃者の妙な証言の所為もあってか、今や都市伝説と化している存在だ。

——左目に、二つ瞳があった。

巫女の背筋を悪寒が走った。怪談等が苦手なこともあり、噂とい

えど必要以上に不安になる。だからこそ、神継が二度目を引き受けてくれて、内心ではほっとしたのだ。

それに巫女には、その噂の正体に心当たりがあった。“彼”が言ったことが本当なら、“鬼目”は人間ではないらしい。

今日出会ったばかりの“彼”を、完全に信用した訳ではない。しかし、その“彼”も、“鬼目”と同じような存在だと言う。生来の人の好きもあつてか、巫女はその話になんとなく納得してしまったのだ。

そういえば、当の“彼”——平八郎は、さつきから姿を見せていない。巫女が風呂に入ったのが十二時過ぎなので、一時間半も行方不明だ。

ふと、巫女の頭に嫌な映像が浮かぶ。夜の街を歩く平八郎。その姿は、あまりにもシニール過ぎた。あんな浮世離れした格好で、街を歩いたら、補導されるかもしれない。

不安になった巫女は、椅子から立ち上がって辺りを見渡してみた。少なくとも、居間・台所・廊下には見当たらない。

「平八郎さん」

名を呼んでも返事はない。巫女は嫌な汗を感じながら、家の中を探すことにした。

玄関から始まり、庭、広間、トイレ、風呂場、物置、両親の部屋、巫女の自室、神継の部屋を回ったが、いずれにも平八郎の姿は無い。広い家とはいえ、造りは平屋建てだ。それに、もうかなり奥まった

所まで来ている。

再度、さっきの想像が巫女の頭を過ぎった。警察に捕まったりしたら、今以上に面倒なことになる。第一、まだ神継にも話していないのだ。

（なんて説明すればいいんだろ……）

廊下を歩きながら悩んでいた巫女は、突き当たりで立ち止まった。そこには、明らかに浮いた雰囲気、金属製の扉。神社と母屋を繋ぐ、渡り廊下の扉だ。

鍵を確認する。先程戸締まりを確認した時から変化は無い。

（神社には行ってないみたい）

胸を撫で下ろした巫女は、平八郎の言葉を思い出して再び緊張した。

『僕は少々特別だな。具現も霊化も自由なのだ』

鍵なんて意味が無い。そう気付いた巫女は、扉を開けて渡り廊下に出た。季節の変わり目の風は、まだ少し冷たい。灯りの無い渡り廊下は、何処となく不気味だった。今夜は月も無い。

恐る恐る足を踏み出すと、木製の足場は軋んだ音を上げた。爪先から伝わる感触に、全身が粟立つ。

「――！」

声にならない悲鳴を上げて、巫女は小走りに神社側の扉まで駆け寄った。十メートルも無い廊下なのに、心臓は早鐘を打っている。深呼吸をしながら取っ手に手を掛けた巫女は、ある間違いに気が付いた。

(……鍵がかかっている)

当たり前といえば当たり前。屋外に露出した扉に鍵をかけずにおけば、盗みに入られても文句は言えない。神継はああ見えて几帳面な性格だ。閉め忘れる、なんてことはまずない。

(どうしよう。鍵は兄さんが持ってるし……)

もし中に平八郎がいたとして、巫女にそれを確かめる術は無い。桐藤神社の神殿はそれなりに巨大なため、ここから呼んで聞こえるかも怪しい。何より、こんな時間に大声を出すのは近所迷惑だ。

ある種の諦観を感じた巫女は、ややうなだれ気味に神社を後にする。こうなったらもう、何事も無いことを祈るだけだ。

渡り廊下の不気味さも忘れたように歩く巫女の目に、母屋の北にある裏庭が映った。裏庭という割には、結構な広さの空間に多様な植物が植わっている。平屋建ての母屋越しでは、陽光も抵抗無く注がれるからだろうか。

そこに佇む、軽具足姿の青年。何処か粗暴な色を秘めた瞳は、何処とも無い虚空を見つめている。その瞳を縁取る眼瞼一つを取っても、彼の表情は険しいと言えるくらいの壮烈さを感じるようだった。

放つ空気は凜冽。咲きかけの沈丁花の傍らに立つ彼の佇まいは、

棘を持つ野茨の趣きに似ていた。

「沈丁花いまだは咲かぬ葉がくれの　くれなゐ蕾白ひこぼるる」

不意に聞こえた声に、青年はそちらを見やる。

「なんだ、お主か」

「なんだ、じゃありません。平八郎さん。心配したんですよ、急になくなって」

「人を幼児のように言いおって、失礼な娘だな。お主が風呂に入るといふから、気を効かせて外に出たというのに」

心外だとしても言うように眉を顰める青年に向かって、巫女も不満げな視線で返す。

「本来なら女子の言なぞに気をかけることは無いのだが……。なんといったか、お主から聞いた今の世の制度……。そうだ、“男女平等”と言ったな。それに則って行動したのではないか」

巫女は目を丸くした。強^{こわ}そうな外見とは裏腹に、随分と饒舌に語るものだ。よく見れば、表情も幾分か軟化しているようだ。

「聞いているのか？」

「あ、ハイ。そうですね、とりあえず問題も無かったから、もういいです」

平八郎の言葉を遮るように、笑いながら胸の前で手を上げる。

「時に、先程の和歌はお主の作か？ 儂も一応はたしなみがあるが、あのような歌は聞いたことがない」

「あれは確か……明治の歌人の作だったと思います。作者までは知らないんですけど」

「ふむ、後世にも雅のわかる人間が生きていたか」

感慨深げに呟くと、顎を撫でながら宙空へと目を向ける。その目からは、先程までの粗暴な光は、感じ取れなかった。

「――！」

不意に、巫女の耳が聞き慣れた声を捉えた。遠くから聞こえたのは、他ならぬ神継の声。次いで足音が、此方に近付いてくる。

「平八郎さん！」

「わかっておる、そう急かすな」

不満げに皺を寄せた後、平八郎は溶けるように闇夜と同化した。存在が消えた訳ではなく、彼を構成する物質がこの世の物ではなくなっただけだ。

「お、巫女。いるんなら返事しろよ」

渡り廊下に姿を現した神継が、笑いながら近寄ってくる。巫女の目の前で立ち止まった時、微かに香水が香った。

「兄さん、砌は？」

「家に戻った。心配しないだろ、アイツだし」

「そう、良かった」

心底安心した風に、胸の前で手を組んで息をつく。その顔は、安堵の笑みで満ちていた。

（……上せちまうな）

神継は巫女のその顔を見て、渋面に似た表情を浮かべる。探しに行った自分への労いよりも、砌の安否の確認を優先する妹に、むずかゆいような感覚を覚えた。

「安心したらもう寝ろ。いつまでもこんな所にいると、冷えるぜ」

巫女の肩に手を置いてそう言うと、神継は踵を返して庭の方へと向かう。良く見ると、靴を履いたままだったらしい。

「兄さん、何処か行くの？」

「ああ、ちよつとな」

「もう遅いよ？」

「朝には帰るから大丈夫」

「朝には、って……」

神繼は呆れる巫女を後目に、手を振りながら裏庭を出ていった。姿が見えなくなると同時に、平八郎が暗闇から浮かび上がる。

「あの小僧……」

「どうかしました？」

「……兆しが見える」

平八郎は口調にそぐわない精悍な顔に皺を寄せ、神繼の消えた所から巫女の目へ視線を移した。

「お主と同じ兆しだ」

巫女が息を飲む音がした。

巫女と同じ兆し。それは、平八郎のような人外の者と結ぶ、印だった。

「兄さん……が？」

「ああ。早ければ今夜にでも……」

——朝には帰るから。

「兄さん……知って？」

「うむ。儂のことも気付いていたかも知れん。勘のいい小僧だ」

巫女は改めて驚いた。幼い頃から共にいた兄が、なんだか違う物

になっていくような錯覚を覚える。兄も、私を見てそう感じたのだろうか。と、奇妙な感覚になった自分がいた。

（砌は……どうなんだろう……）

頭に浮かぶ、昔馴染みの顔。彼の顔から笑顔が消えて、一体どれだけの時が経つのだろう。

幼き日を思い返して、巫女はまた、不安な衝動に駆られた。

先に巫女を家に戻らせ、平八郎は再度彼方へと目を向けた。桐藤家から見て南の方角、都の中心へ近い方へと。

「鬼目、か。巧く例えられたものよな」

思い浮かぶのは、反逆の将。自分よりも遥かな過去を生きた、伝聞の中でしか聞いたことのない男の姿。それは、人と呼ぶには余りにも禍々しい風采だった。

何時しか、平八郎の眼に先刻と同様の、荒々しい光が宿る。殺気と鋭気が、対象も無く宙に荒振る。

「何故人を切るかは知らんが、到底、気味が良いとは言えんな」

最後に一度虚空を睨みつけると、踵を返して闇夜へと溶け込んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2475b/>

Spaced-Out ~ saber of partisan ~

2010年12月15日14時38分発行